

各地で話題の病害虫

ケブカノメイガ

学名: *Crocidolomia binotalis* ZELLER
英名: cabbage cluster caterpillar

ケブカノメイガは、東南アジア・アフリカなどに広く分布し、アブラナ科野菜の害虫として知られている。

本種は、これまでに長崎市、屋久島、沖縄本島などで成虫がわずかに採集されているだけで、わが国には定着していないと考えられていた。しか



沖縄県農業試験場 金城美恵子氏提供

し、平成3年秋、静岡県下でキャベツを食害している終齢幼虫が発見された。また、最近になって沖縄県内で本種が周年発生していることが確認されている。

成虫は開張22~26mmであり、卵は扁平で、数十個の卵塊として植物の葉裏や茎に産みつけられる。終齢幼虫は12~15mmで、淡緑色を呈し、背側方には暗緑色の帯がある。蛹は10mm程度で、土の表面近くで蛹化する。

海外では、防除薬剤としてアセフェート、ホサロン、ダイアジノンなどが有効とされている。沖縄県では、コナガなどへの薬剤防除が定期的を実施されており、これまで目立った被害は出ていないが、本種の発生には注意を要する必要がある。

ナモグリバエ

学名: *Chromatomyia horticola* (GOUREAU)
英名: garden pea leafminer

大阪府農林技術センター内の露地ほ場で平成2年2~11月の間、シュンギクの無農薬栽培を5回繰り返したところ、ナモグリバエによる被害が発生した。

また、ヨーロッパ向け日本料理用のシュンギクにナモグリバエが高率に寄生しているのが輸出検



大阪府農林技術センター 田中 寛氏提供

査で発見され不合格になる事例があった。

成虫は4~5mmの小さな灰褐色のハエである。幼虫は円筒形をした乳白色のウジで、葉肉内を蛇行しながら食害し、葉には不規則な白いすじ模様ができる。老熟すると3mm程度になり、食害部の中で蛹化するので、葉の表皮を透かし見ると黒褐色で楕円形の蛹が確認できる。

本種は、その名のとおり、アブラナ科の野菜類やエンドウなどのマメ類に大きな被害を与えているが、シュンギクへの被害はあまり知られていなかった。

今回のように特に多発した場合は、幼虫による被害と産卵痕が目立ち商品価値が著しく低下するので、防除対策が必要である。

バラ半身萎ちょう病

学名: *Verticillium dahliae* KLEBAHN

平成2年秋、島根県のバラ栽培農家ほ場で、葉が黄化落葉して、株全体が枯死する症状が多く発生した。本症状株からは *Verticillium* 属菌が高率に分離され、接種試験と形態観察の結果、この菌は *Verticillium dahliae* KLEBAHN であると同定され、バラ半身萎ちょう病と診断された。

本病は昭和58年に神奈川県のパラに国内で初めて確認され、その後宮城県でも発生が認められているが、島根県では初めてのことである。



島根県農業試験場 広沢敏之氏提供

初期症状は複葉及び葉身の片側だけが葉脈退緑、黄化しているものが多く、枝の片側が褐変する。また、落葉したりシュートが枯死し、激しいときは株全体が枯死する。病した葉柄、主茎及び根冠部を切断すると、導管部が褐変している。

本病原菌の *V. dahliae* は、各種植物に対する病原性の差によりいくつかの菌群に類別されており、今回島根県から分離された *V. dahliae* はナスに強い病原性を示すA群とエダマメに病原性を示すエダマメ系の2系統が存在することが明らかになったが、その詳細については今後の研究が待たれる。

アルストロメリア菌核病

学名: *Sclerotinia sclerotiorum* (LIBERT)
de BARY

英名: stem rot

アルストロメリアはヒガンバナ科の宿根草で、近年栽培面積が増加している。平成3年に山口県下のビニールハウスで栽培されているアルストロメリアに水浸状の病斑をつくる病害が発生して、しおれや欠株が目立った。

病徴は、茎の地際部に周縁明瞭な大型不整形病斑として形成され、白色綿毛状の菌糸に覆われる。また、茎内部に大きさ2~4mmで、やや楕円形の白色菌糸塊と淡い黄色~褐色の菌核がつくられ、



山口県農業試験場 井上 興氏提供

成熟すると黒色になる。本菌は、子のう盤の形態と胞子の核数から *Sclerotinia sclerotiorum* と同定された。

この分離された菌は、ダイコン、キュウリ、レタス、エンドウなど多くの作物に病原性をもっているが、本菌によるアルストロメリアの病害は、わが国では初めてである。

防除法は、被害部に生じる菌核が伝染源となるので、被害株は菌核ができる前に抜き取り焼却する。また、菌核病が発生した畑では栽培しないことが重要である。